

[学会情報]

日本ブドウ・ワイン学会西日本地域研究会 第16回研究集会に参加して

岡田ちから

京都大学

Reports on 16th Meeting of Western Division of ASEV Japan Chapter

Chikara OKADA

Graduate School of Agriculture, Kyoto University

日時：2017年3月5日（日）

場所：京都大学北部総合教育研究棟益川ホール

1. 後藤奈美氏（独立行政法人 酒類総合研究所）『日本のワイン産業』
2. 三澤彩奈氏（中央葡萄酒（株））『Japanese Wines-Pure, Elegant and Authentic』
3. 小田滋晃氏（京都大学）『農業生産諸資源の保全・再生とワインツーリズムの可能性』

報告1 後藤奈美氏（独立行政法人酒類総合研究所）
酒類総合研究所理事長を務める後藤氏から日本ワインの生産と消費の現状、気象条件とブドウ品種、ワイン醸造について報告がなされた。

まず、日本のワイン消費量の増加に伴い国産ワインの生産量が増加していることが冒頭で説明された。次に、降水量や日照時間等の栽培条件の相違から、ヨーロッパとは異なる品種が日本で栽培されていることに言及した上で、日本独自の品種“甲州”を対象に報告者が行ったSNPs解析・DNA解析について詳しい説明がなされた。解析結果からは、ヨーロッパ系ブドウがシルクロードを通り日本へと渡る過程で東アジア系野生種と交雑し、適応性を獲得したことが示唆され、この事実は聴衆に歴史のロマンを感じさせるものであった。さらに、赤ワイン用ブドウを対象に行ったアントシアニン濃度に影響を与える要因についての重回帰分析結果の報告もあり、非常に充実した内容であった。

報告2 三澤彩奈氏（中央葡萄酒（株））

栽培醸造家であり、2014年に世界最大のワインコンクールにて日本初の金賞を受賞した三澤氏から日本ワインの歴史、ブドウ品種甲州の栽培・醸造、料理との相性等に関する報告がなされた。彼女が経営するワイナリーは1923年に山梨県に設立され、品種“甲州”を使用したワインを醸造している。最高品質のワイン作りのためには、日照時間の確保、排水と雨対策、ものづくりの精神と職人芸が重要であると考え、光合成効率向上を目的とした新梢の高さと葉面積の調節、雨除けシートの開発、徹底した選別作業を行っている。なでしこ色の“甲州”の写真を示し説明する報告者からは、ワイン作りに対する情熱が強く伝わってきた。

最後に、海外における日本ワインの評価と今後の展望について報告がされた。今後ワイナリー間での共同輸出の拡大、さらなる品質向上に向けた取り組みを実施し、日本ワイン産地確立を目指すという。

報告3 小田滋晃氏（京都大学）

小田教授からは、投稿予定の論文の概要について報告がなされた。論文では、一部地域で進みつつあるワインツーリズム事業の展開によるブドウ・ワイン産地の再生・再編の事例に着眼し、ワインツーリズム事業が展開メカニズムを通して地域の農業生産諸資源の保全・継承に果たす役割と可能性について整理することを課題としている。本研究は地域に存在するある種の「価値」を認識し、その「価値」をいかに追求して事業化を進めたかを明らかにした点で、学術的意義を有すると言えよう。